

博士論文要旨
Abstract of Doctoral Dissertation

古代日本における「ふるさと」意識の系譜

—日本人の原風景の形成と変容をたどる—

The Notion of 'Furusato' in Ancient Japan:
Formation and Transformation of the Archetypal Landscape

国際基督教大学 大学院
アーツ・サイエンス研究科

Presented to
International Christian University
Graduate School of Arts and Sciences

2017年3月7日
March 7, 2017

モリソン・リンジー
MORRISON, Lindsay R.

博士論文 要旨

序文

「ふるさと」とは何か？

愛しい父母。懐かしいあの家。日が暮れるまで友達と遊びまわった野川や裏山。「ふるさと」のこうした情景は長らく日本人の心を魅了し、あらゆる媒体——それは小説であれ、詩歌であれ、映画や流行歌なども数え切れないほどあるが——の題材にされてきた。いつでも温かく迎えてくれるあの「ふるさと」は、日本人の誰もが懂れて、懐かしく思う。

ところが、単純に思えるこの問いは、実は非常に深く、複雑な問題である。なぜなら、日本語の「ふるさと」は単なる人の生地だけを意味する語ではないからだ。

「ふるさと」が呼び起こす思い出や感情こそ十人十色であろうが、現代日本人が抱えている「ふるさと」のイメージにはいくつもの共通している部分がある。そのイメージ生成の一因となったのは、高野辰之作詞・岡野貞一作曲の文部省唱歌「故郷^{ふるさと}」

(1914年)の影響であろう。かの山かの川、父母や友がき、固有名詞のない無名な「ふるさと」には誰もが共感できるように作られた歌なのだろう。しかし、この歌詞に描かれたような情景の中で、どれほどの現代日本人は生まれ育っているのだろうか。言うまでもないが、このような場所を自分の生地と言える人は希少である。それにもかかわらず、「ふるさと」の牧歌的な里山風景は確固たるものとして、日本人の「原風景」として永きに渡り、日本人に共通するいわば無意識の文化的素地となってきた。

このような「ふるさと」の代表的風景はいつから、どのようにして形成されたのか。多くの研究者は「ふるさと」が近代に成立した概念だと主張している。確かに近代になってから国民の移動ははるかに自由にはなったが、近代以前に移動が行われなかったわけではなかろう。そこで、本研究は「ふるさと」をめぐる多くの先行研究から離れて、「ふるさと」を単に近代以降の現象としてではなく、千年以上存在し続けてきた語および概念として扱う。

「ふるさと」は時代の特徴に染まっていながらも、同時に時代を超えたものであり、包括的な歴史的な文脈に置き直すことによるのみ、その源流が明確になる。そ

のため、「ふるさと」の過去と現在について考察し、日本文化における「ふるさと」の意義を明確にすることが、本研究の主な目的である。また、この研究の最終目的は日本人の「ふるさと」意識の形成と変容を古代から現代までたどることであるが、その第一歩として本稿は、語り尽くされた近代の「ふるさと」からは目を離し、十分に語られてこなかった古代の「ふるさと」に焦点を合わせる。

第一章

第一章では、日本の神話を収録した二つの書物、『古事記』（712年）と『日本書紀』（720年）における「ふるさと」について考察する。まず、『日本書紀』には漢字の「故郷」は一度しか出てこないため、「ふるさと」という語自体の考察をするのには限界がある。したがって、本章では『日本書紀』における「故郷」の一例の他に、「魂のふるさと」と呼ばれてきた「^{はは}妣の国」の観念と、望郷歌を詠んだのち異郷で命を落としたヤマトタケルの伝説をも取り上げる。

『古事記』において「妣の国」は二回、イザナミとイザナギの神話と、山幸彦と海幸彦の神話に出てくる。この語は近代の民俗学研究において、古代日本人の「魂のふるさと」として考えられてきたが、筆者はこの考え方をフェミニズム批評の観点から批判する。「妣の国」の語が用いられる二つの神話を比較することにより、神の性別によってそれぞれの領土あるいは坐す国の違いが明らかになる。すなわち、男神側（イザナギ、ホオリ）の領土が上国・地上・陸・山・天とされ、反対に女神側（イザナミ、トヨタマヒメ）の領土が下国・地下・黄泉・根・海に象徴される。

『日本書紀』における唯一の「故郷」の実例はホオリ（ホホデミ）の元いた場所である「上国」を指しているにもかかわらず、民俗学者はこの「上国」ではなく、むしろ女神側の暗く穢らわしい「妣の国」を古代日本人の「魂のふるさと」と見なし てきた。

なぜ日本神話の主役を務める天つ神または天皇家が支配する天や陸ではなく、敗北し抑圧された女神の坐す「妣の国」を「ふるさと」として見てきたのか。精神分析の研究やクリステヴァのアブジェクション論を用いることによって、この「妣」が原始的で暗澹たるグレート・マザーの暗き深淵のようなもので、主体としての男性は他者化された「妣」へ帰ろうとし、母と赤ん坊のような自我と他者の統一感を

取り戻そうとする。そうすることにより、「妣の国」は生きることの苦しさをかき消してくれる現実逃避的な措置として機能するが、そのために母は永遠に他者化され、「憧憬」という名前の「欲望」の対象として描き出さなければならないのである。

一方、ヤマトタケルの伝説においては、「妣の国」へ帰りたいと願ったスサノオやイナヒと異なり、ヤマトタケルは父の景行天皇がおられる大和国へ帰郷することを切に望む。『古事記』や『日本書紀』には成語として登場しないが、天皇家が治める大和国こそ「妣の国」の対をなす「父の国」ではないかと筆者は論じる。しかし、「妣の国」が敗北者の行き着く場所であるのとは反対に、「父の国」は成功者にのみ開かれている場所である。伊吹山で敗れてしまったヤマトタケルは、それまでに幾度も戦いに勝利したにもかかわらず、最後に敗北者となり、「父の国」への道は閉ざされ、遠くから自分の生まれ故郷を切なく歌う他はなかったのである。

「妣の国」と異なって、「父の国」には甘えようがない。他界または異郷とされる「妣の国」は未開の地であるため、おぞましく恐れ多い場所である反面、可能性に満ちた世界でもある。だから、そこを理想化し、心を委ねることもできる。「父の国」は秩序の光に照らされた既知の現世なので、根源的なものから独立した自我がたくましく生きなければならない、厳しい父原理に支配されているところである。

第二章

第二章では、現存する日本最古の歌集である『万葉集』（八世紀頃）における「ふるさと」について論じる。『日本書紀』では、漢語の「故郷」は「一書曰」に一度しか使われていないが、『万葉集』においては、「ふるさと」の語を歌い込んだ歌が何首も見られる。そこで、本章の第一の研究対象は「ふるさと」の語を含む歌とする。和歌の考察を通して、『万葉集』における「ふるさと」はどのような意味で使われ、どのように表象され、またどのような景物とともに詠まれたかについて検討する。それに加えて、家郷から遠く離れ、望郷の念を歌った防人歌についても考える。防人歌の中には「ふるさと」の語は一度も現れないが、その理由と、防人の郷愁の対象がどのようなものだったのを考察することが、本章の第二の目的である。

本章の和歌の考察では、「ふるさと」または類義語の「ふりにしさと」を詠み込んだ19首、さらに「故郷」あるいは「古郷」を題詞に入れた15首、左注に「故郷」を含んだ6首の歌を見ることによって、『万葉集』における「ふるさと」のイメージを明らかにする。その結果、遷都後の「旧都」を意味することが多く、特に飛鳥旧京の印象が根強いことが明確になる。こうした遷都の体験および旧都の表象は『万葉集』における「ふるさと」のイメージの根底に流れている。

貴族たちが古い都を後にして新都へ移った時に、「ふるさと」に残された人、または「ふるさと」を訪れた人は世に忘れられた古京の中で喪失感と寂寞を覚えた。そのような荒涼たる「ふるさと」は、愛する人との離別や失恋の舞台として描き出されたが、多くの場合、「ふるさと」に残されたのは女性であり、さらに女性が詠む「ふるさと」と男性が詠む「ふるさと」には差異が見られる。要するに、女性は「ふるさと」をあっさり詠む、もしくは「ふるさと」にいる自分の状況を恨むのに対して、男性は「ふるさと」を偲んで、感傷的な思いを寄せることが多い。これは、「妣の国」という原型が『万葉集』の「ふるさと」の根底にも流れていることを示していると考えられる。「父の国」にいられず、見捨てられた女性が朽ち果ててゆく「ふるさと」に留まることを余儀なくされ、自ずと「ふるさと」と「女性」は結び付けられるようになった。さらに、「ふるさと」と他界、常世と常夜のつながりを「時鳥」「花橘」「山」「夜」「鳥」「墓」などの表象を通して垣間見えた。前章からの続きで「ふるさと」は他界に通じる空間だということを、『万葉集』の歌でも確認できた。過去の形見として、彼岸への通過路として「ふるさと」は上代人の想像の中で働いていることがわかる。

防人歌は「ふるさと」の語こそ用いられていないが、その代わりにきわめて具体的に実在感のある故国の風景がある。防人たちは後に残した肉親や恋人、故国の自然物に憧れて切々と歌う。防人にとって、家族や故国の風景は彼らのアイデンティティである。長旅の果てに家郷の大切な人々と慣れ親しんだ風景が待っていることを夢見る。私たち現代人が実際に「ふるさと」の語を含む歌よりも防人歌に共感するのは、おそらく現代の「ふるさと」の観念がそうした民俗的で一般の人々が共感しやすい情緒に基づいているからであろう。

一方で、貴族たちにとって「ふるさと」である旧都は再び帰ることのない、寒々とした廃墟である。彼らのアイデンティティの中心にあったのは「ふるさと」では

なく、「都」であり、天皇であり、天平文化である。『万葉集』における「ふるさと」は現代日本人が思い浮かべる懐かしい「ふるさと」像とは甚だしく異なるものである。現代語の「ふるさと」といえば、まず高野辰之作詞の唱歌「故郷」の歌詞にあるように、「兎追いしかの山、小鮒釣りしかの川」的な里山風景が思い出される。その中には温かい人間関係や、昔ながらの生活が保存されている。ところが、『万葉集』の「ふるさと」はこの理想郷のような心象とは異なる。草深く生い茂り、自然に戻りつつある「ふるさと」に対して過去の思い出と愛着は湧いたものの、そこは結局都に劣る「鄙びた」地でしかない。そして、そのような人けのない「ふるさと」にいと、「喪失」と「別離」による深い孤独感を噛み締めなければならない。

現代日本人が思い描く「ふるさと」は永遠に変わらず、いつか帰りたいと思っている場所として想像することが多い。「ふるさと」は現代人にとって「喪失」を意味するものであるよりも、自己の「完成」を意味するものと考えているためである。つまり、アイデンティティや自己形成と濃厚に結び付いているものである。ところが、古代の貴族たちにとって、自然に覆われ荒廃に向かっていく「ふるさと」は望郷やアイデンティティの形成よりも、むしろ喪失と欠損を意味するものとして見られていた。彼らが長年築き上げた華麗なる文化が朽ち果てるのを前にして、自分たちの存在の脆さを認識しなければならなかった。そのため、上代の貴族たちは、かつての繁栄を失った「ふるさと」よりも、現在栄えている「都」を自分たちのアイデンティティの中心に据えていたのである。

第三章

第三章では、三代集と呼ばれる最初の三つの勅撰和歌集、『古今和歌集』（905年）『後撰和歌集』（950年代）『拾遺和歌集』（1005年）における「ふるさと」または「ふりにしさと」を詠み込んだ歌を考察する。平安時代は平安遷都が行われた794年から、1185年に政権が鎌倉に移るまでの約四百年の間とされている。時代の幕開けとなった平安遷都は、大きな歴史的な変動であるとともに、平安に生きた人たちの「ふるさと」意識を大きく変容させることになった。都が平安京に移ると、平城京が「ふるさと」と見なされるようになって、「ふるさと」のイメージが少し

ずつ変わっていく。さらに、和歌における「ふるさと」の用法が拡大し、「旧都」だけではなく、より広い意味で用いられるようになる。本章は、勅撰和歌集の詩的カノンを確立したと言われる三代集の中の「ふるさと」を詠む歌を取り上げて、『万葉集』で作り上げられた「ふるさと」像がいかに引き継がれ、また、いかに変容していったかを考察することを目的とする。

『万葉集』では、「ふるさと」は共同体の記憶の地である「旧都」の別称として用いられているが、三代集の時代になると単に「旧都」を指し示す語から、多様な意味をもつようになる。例えば、個人の元いた国または親元、かつて住んでいた土地、普通っていた恋人の家、あるいは亡くなった人と縁のある土地を指すようになる。これは、平安時代において「ふるさと」の語がより個人の記憶、個人の感情と結び付けられるようになったことを示していると考えられる。さらに、和歌の発達と掛詞の技巧によって、「ふるさと」はより複層的で観念的な表現となって、比喻として用いられるようになる。また、都人に忘れ去られた「ふるさと」のイメージを恋人に見捨てられた自分に見立てたり、もしくはいにしえなる「ふるさと」を年老いた自分の身に見立てたりするなど、「ふるさと」の風景と作者の心身が重なり合っで一体化していく例もあった。こうした時代の変化にともなう意識や表現の変化は、「ふるさと」の語に見られる。

「ふるさと」は何よりも記憶と結び付けられる場所である。「ふるさと」は過ぎ去りし日々を思い出させる装置であるため、「ふるさと」に立ち寄った時、私たちは歴史——宮廷の歴史であれ、個人の歴史であれ——に直面しなければならない。三代集における「ふるさと」は過去のことを思い出させる一方、世に忘れられて人々に見捨てられた場所なので、「ふるさと」と結びつく思い出は常に忘却の深淵に沈みかねない。「ふるさと」は人間文明が古くなって荒廃して、自然に戻りつつある場所である。平安時代の歌人は、「ふるさと」のそうした自然の状態から繁栄へ、また衰退して自然の状態に戻るという循環性を見出して、朽ち果てる「ふるさと」と自然の再生を象徴する「春」や「花」とを合わせて詠んだ。さらに、「ふるさと」は昔と今、記憶と忘却をつなぐ場所として、他界との縁を持ち、故人を悼む哀傷歌の他に、異郷を暗示する「吉野」「ほととぎす」「霞」などの景物とともに詠まれた。同時に故郷と異郷を指し示す「ふるさと」には、こうした往復性・循環

性が潜むが、そうした循環性・回帰性を代表するのは「ふるさと」にひっそりと咲く「花」、つまり見捨てられた女性である。

先祖の文化と生活を象徴する平城京が荒廃していくさまを眼前にして、平安時代に生きた人々は世の無常を思い知らされた。貫之が『古今集』の仮名序に記すように、人々は歌を通して乱れた心を慰めようとする。平安歌人は、荒れ果てた「ふるさと」を審美的な「花」や「雪」と一緒に詠むことで、老いることの悲しみを美しい情景に埋めて、永遠なるものに近づけようとした。このように、平安時代の歌人たちは『万葉集』で確立された「ふるさと」のイメージを基盤にして、さらに洗練させて、自分たちの人間・自然・時間への哲学を含ませたのである。

結論

本研究の考察で明確になったのは、古代日本人の「ふるさと」の根底には二つの主要な表象が潜んでいるということである。それは、「旧都」の連想と、「妣の国」という原型の二つである。

『万葉集』および三代集において、多くの場合、「ふるさと」は「旧都」を指した。それは、古代日本における遷都の歴史的現象と密接に繋がっている問題である。遷都のたびごとに貴族は古い都を見捨てて、新しい都へ移住しなければならなかったというように、平安遷都まで不安定な生活を送っていた。そのため、「荒れ果てた里」という意味でも、「昔住んでいた里」という意味でも、貴族たちにとって旧都こそ「ふるさと」であった。やはりどの時代、どの文化においても馴れ親しんだ土地から離れることは悲劇である。しかし古代日本において都は絶対的で、貴族の文化の中心だったため、その悲劇の形は旧都への「望郷」として表れたのではなく、むしろ時間の残酷さ、人事のはかなさへの悲嘆として表現された。本研究を通してしばしば述べていることではあるが、近現代と違って、和歌における「ふるさと」は必ずしも「望郷」の対象ではなかった。それは、古代における「都」と「鄙」に対する視点の違いに基づくと考える。

平安中期に成立したとされる『古今和歌六帖』では、所収されている約 4500 の和歌が中国詩集にならってさまざまな分類（歳時・天象・地儀・人事・動植物）に分けられ、さらに約五百の題に小分けされている。興味深いのは、『古今和歌六帖』

では「ふるさと」が一つの題とされていることである。さらに、その「ふるさと」の題は「都」ではなく、「田舎」のグループに入れられている。「ふるさと」の他に「田舎」に入っている題は、「くに」「こほり」「さと」「やど」「やどり」「かきほ」がある。この通り、「ふるさと」は旧都でありながら、「鄙」の一部として考えられていた。

近現代では、田舎にある「ふるさと」は都会と対立関係をなし、田舎が温かく、自然豊かな「日本的な」ところとされる一方、都会が人工的で冷たく、「西洋的な」ところと見なされることが多い。ところが、古代日本では、華やかで美しい都に対して、「鄙」は寒くて寂しい場所と想像されていた。「鄙」は文化の果てるところだけでなく、荒ぶる神が支配する恐ろしい未開の地と想像された。いわば現代人が思い浮かべる「兎追いしかの山」的な田園風景の「ふるさと」とは程遠いイメージなのである。一方、都は天皇と直結している天つ神の空間で、守られた世界であった。だから、田園化した旧都ではなく、都から出ることこそが悲劇で、都こそが望郷の対象となった。古代の貴族たちにとって、「鄙」は慣れ親しむ場所ではなく、恐ろしい未知の世界であったため、むしろ「都」が現代語でいう「心のふるさと」であった。

和歌に詠まれる「ふるさと」は「鄙」の部類に入るが、古くなった「都」ではあるので、歴史的かつ文化的な意義をもち、和歌の世界を構成する重要なテーマの一つである。和歌において、永久なる自然とはかない人事が対比されることは常である。すなわち、永遠に再生される自然と異なって、人間や人間が作るものは一時的に繁栄して、いずれは衰退していく。「ふるさと」も同様で、かつて都として繁栄する土地であったが、今となって都の残像に過ぎず、寂れてしまった宮跡となっている。このように、和歌における「ふるさと」は栄枯盛衰を象徴するものである。だから、古代日本人が荒れ果てた「ふるさと」を訪ねた時、現代日本人が想像する郷愁でもなく癒やしでもなく、実存的不安を抱いたのである。繁栄と衰退のみならず、「ふるさと」のイメージの中に、いくつもの対比が見られる。昔と今、都と田舎、人間と自然、生と死、記憶と忘却、女性と男性など。こうした両義性および多義性は「ふるさと」の根本的な特徴の一つであると考えられる。

一方、『古事記』に二回登場する「妣の国」は古代日本人の「魂のふるさと」と見なされてきた。日本人の原風景とされるこの国は、懐かしく忌々しい棄却された

妣が坐す場所である。女性の身体に内在する「美」（性）と「死滅」が混沌をもたらすと危惧されたため、光と秩序を象徴する「父の国」から排除して、暗き黄泉国・海原へ葬られてしまう。そこへ息子が向かおうとするので、「妣」への「憧憬」は実は男性による「欲望」なのではないかという結論を得た。

ところで、この「妣の国」の原型は和歌にも継承されてゆく。『万葉集』と三代集では、「ふるさと」が女性、または女性の居住地を連想させる例をいくつも見た。一夫多妻制の影響も考えられるが、男性が宮廷とともに新しい都の土地へ赴くのに対して、女性が朽ち果てる旧都に残されるケースが多かったようである。そのため、女性と「ふるさと」は結び付けられて連想されるようになったが、それによって女性は「ふるさと」の擬人化として見られるようになる。

旧都は寒々とした寂れた土地として考えられていた。だから、そこに残されることは、決して喜ばしいことではない。事実、第二章と第三章で見た通り、女性が「ふるさと」に置き去りにされた自分の境遇を嘆く歌が多い。『万葉集』から三代集時代へと隔たっていくと、女性は「ふるさと」に忘れ去られた身だけではなく、さらに「ふるさと」と一体化し、そこにひっそりと咲く「花」に見立てられるようになる。この「花」のイメージは「妣」と同様、女性の容姿の美しさや性的欲望を象徴するとともに、花がすぐに色褪せて散ってしまうように女性の身体に内在する死の予兆、すなわち棄却^{アブジェクト}なるものをも連想させる。

「考える主体」としての男性は「ふるさと」を思い、「ふるさと」を偲ぶ。そして、そこに咲いている美しい花を「見たい」という欲望を表す。一方、「ふるさと」に忘れ去られた女性は文化の中心である都から省かれ、寂れた旧都の地で孤独に過ごさなければならない。こうして和歌における「ふるさと」はまさに「妣の国」、女性が置き去りにされる場所なのである。

近代日本では、地方で生まれ育った人たちが都会に出て成功したら、晴れ姿で地方に帰るといった立身出世の思想が一般的であった。そして現代語の「ふるさと」は絆、家族、伝統、愛、コミュニティなど肯定的なものと結び付けられるが、古代の「ふるさと」は異なる。本研究を通して、「旧都」および「見捨てられた女」＝「妣」のイメージによって、「ふるさと」はむしろ別離、失恋、死別、喪失、孤独などの否定的なものを連想させる語として用いられたことが明らかになった。さら

に、古代の「ふるさと」にいるのは成功者ではなく、むしろ敗北者である。恋に破れて男に見捨てられた者、「父の国」に背いた者は都にいることを許されず、旧都なる「ふるさと」に流れ着く。そしてその敗北者の国の代表者となったのは、「妣」である。

古代でも近現代でも、「ふるさと」は過去の記憶と密接につながっている。事実、「ふるさと」が「古い」のは、多くの記憶がその土地に刻み込まれているからである。記憶が積み重なっていくからこそ、歴史ができて、蓄積する過去ができる。古代日本人はそうした記憶の「重み」に気づいていたと言えよう。さらに、古代日本人は人だけではなく、物や風景にも記憶があると信じていた。だから、「ふるさと」に咲く花でさえ、遠い昔のことを知っていると考えられた。「原風景」という概念を理解するために、こうした記憶と土地の相互作用が重要であると思われる。つまり、風景は自己を形成するとともに、人の記憶によって風景も形成される。そのような示唆が、古代日本の「ふるさと」にあると考える。